

# 山行報告書

京都田辺山友会

報告者 植西晃干

山名	氷ノ山	山行名	例会
ルート	福定親水公園登山口—地藏堂—氷ノ山避難小屋—仙谷分岐—山頂避難小屋—神大ヒュッテ—ノ谷休憩所—東尾根避難小屋—東尾根登山口		
山行日	2013年6月9日	天候	晴天・無風
参加者	リーダー：植西      サブリーダー：佐坂 男性：小川、金本、鈴木、中田、西川、樋口、平松(昇)、広瀬、山口（11名） 女性：秋山、五百田、上杉、上田、大谷、岡本、河野、徳田(幸)、長野（9名） 合計：20名		

ルート概略図



(岡本さん提供)

コースタイム		
地名	時：分	
新田辺駅前	集	
	発	6:00
福定登山口	着	
	発	9:20
地藏堂	着	10:07
	発	
弘法の水	着	
	発	10:48
氷ノ山越避難小屋	着	11:15
	発	11:50
コシキ岩	着	
	発	12:25
氷ノ山山頂	着	12:55
	発	13:15
神大ヒュッテ	着	
	発	13:40
東尾根避難小屋	着	14:40
	発	
東尾根登山口	着	15:15
	発	15:30

## 山行報告

正直、体力的に厳しい山ですので その意味で山行案内に少し厳しい内容をSLの佐坂さんに書いてもらった。 といいますのは時間的にも日帰り山行はギリギリ一杯の為参加者が多い程時間がかかるので厳し目に書けば少ないだろうと悪い考えでしたが、蓋を開けると予想に反し多くの参加で特に女性の多さにビックリしました。

そもそも私は今まで山岳会山行は厳しい自然条件の下で自身の能力を試そうと入会する志望者が多かったのですが 近年は趣味にも世代交替があるのか山や自然を楽しもうと軽い気持ちで入会される方が多く見られる様です。 そんな折、上記の条件で参加者が多かった事に驚き京田辺山友会も健全であると喜んでます。

扱て、今回の山行が少しのトラブルも無く予定通りの時間に下山出来ましたのは皆さんの余裕ある体力と協力が有ったの結果だと喜んでます。

ところで水場ですが氷ノ山越避難小屋より5分手前の沢は長い日照り続きの折も水は流れていました。

## 感想文

### 氷ノ山の山行を終えて

平松 昇

私にとって久々の皆さんとの山行でした。この機会に山での班体制のあり方、3点確保等の私見を申し述べたいと思います(教育部員です)。

当日、行きのバスでの挨拶で植西翁曰く、当会は山岳会です。山岳会として厳しい山行を目指すとの意味とあまり参加人数が増えないように厳し目の山行案内を書いたのですが、あに図らんや予想外の20名もの参加をいただきました、云々。今日はきちっとした班体制で行こう。山岳会らしい歩き方で、とそのときに思いました。

私は二班のCLとして最初に「本日は2班体制での山行です。下見をしていますので、一班のあとに付いて行く必要はありません。道迷いの心配は一切ありませんのでどうか一班のことは気にせずに班のペースを守って歩いてください。」先頭にCL植西さん、そして二班SLの中田さんが先頭、2番手に五百田さん班最後尾に私。そして一班SL小川さん、CL鈴木さん最後尾に佐坂さんの体制です。2番手は重要で、先頭は2番手、3番手を確認しながら間を空けないように歩くべきなのですが、2番手が足の速い人だとどうしても先頭を追いかけ、その足音につられて先頭も足を早めてしまいます。こうなると最悪で班を2分してしまう結果になります。CLはそうならないように常に声をかけて班の状況判断とペースを守っていく必要があります。

そして班と班は必ず間を空けて歩くべきです。何故なら、山岳会に所属する我々は山に登る人に迷惑を掛けてはいけなからです。氷ノ山でも約100名の小学生の集団に遭遇しました。比較的広い場所だったので、気にならなかったかもしれませんが、ぞろぞろと途切れのない集団でした。「登り優先」のルールも無視。先生方の技量を疑います。当会では出会ったパーティにさすが京都の山岳会だと思ってもらえる行動をしようではありませんか。

以前の山行で道迷いがあり。前の班の最後尾は常にあとの班を確認して歩くべきだと教えられたとの事。それでは私が言う他のパーティに迷惑をかけない為に間を開けるべきだと言ってることは矛盾します。それではどうすべきなのでしょう？道が分からない人を班のリーダーにしなければならないときは前もって赤いテープとかではなく、はっきりと自らのパーティの印だと解る印を付けながら後続班を誘導し、最終の班の先頭がそれを回収して行く。あくまでも間を空けて歩くのが原則です。

途中、はしごを登るところで、思わず怒鳴ってしまいました。「必ずストックはザックに収納して登ってください」と言っているのにそのまま手にもって登る人がほとんど、事故があったらどうなのでしょう？実はこのあと岩場を登ろうとしていたので、そのためにもここはキツク言っておこうと思いました。おかげで岩場では皆さんザックに収納して登られました。「3点確保」は皆さんご存知だと思いますがもう一度よおーく考えてください。私たちは確保できるのは両手、両足の4点しかないのです。安全の為3点確保しようと思えば1点だけしか移動できません。その手にストックを持っていたらどうなりますか？考えただけで恐ろしいと私は思います。

ともあれ、全員無事で下りる事が出来ました。終わり良ければ全て良しです。

岩場を登って、結構な経験者が感動してくれていました。それを聞いていた人がこんな岩場、大した事がないもっときつい岩に登りました云々。全く、空気を読めない人が山友会にもいるのですね。人が感動している時に水を差すような発言はやめましょう。

氷ノ山は今回も優しく私たちを迎えてくれました。氷ノ越・避難小屋からの頂上の雄姿はいつ見ても良いものです。本来有るべき歩き方をしたつもりですが色々驚かれた事だと思います。安全で他の登山者の方に迷惑をかけない山行を心掛けたいと思っています。



## 書けといわれてようやくその気になって… (氷ノ山山行)

鈴木 正範



曇りながらも降りそうもない空をみながら、今年空梅雨か？農家の人たちにとって騒がしい渦中(TPP)に追い討ちか！それがそのうちに自分達に返ってくるなど下界での生活を思いつつ山行開始。(植西さん、雨が降らなくて田植えができないと嘆くことしきり)

例会にあまり参加していないので皆さんの様子がわからず、誰をターゲットにおくか模索しつつ、トップの小川さんのリードにゆだねる。最初の布滝、不動滝のきつい登りをほどよいピッチでリードしてゆく。すごい！の一言。これなら全員完歩だ！と内心安堵

案の定日照りのためだろう水場の水も涸れていて下見との差を思いおこす。風もなく暑かった。でも皆さん水が足りないということもなく無事下山 快適な山行でした。みなさんありがとうございました。おかげさまで泡をおいしくいただきました(^o^)

班編成 : 会山行はなんかおかしい。というより考えていない。  
誰の指示なんだろう？

リーダがトップで道案内、サブが最後尾で脱落、安全管理、その間に必ず班があるように。トップから先へは行ってはいけない。しかし行動は班で動くように。後ろの班は前の班に遅れないように。とかとか。でも前の班が休憩したら後の班も休憩しないとリーダは休憩できないよ！で、長い列ができてしまうよ。もし次の班が前の班を追い越したらリーダは追い越した班のトップをリード？こんなこと会は規則としていたの？

いつ写真を撮ったり風景を堪能したりするの？ うぁ！ しんど!! ツアーではあるまいし。

後日の酔い話 : 今回の下見は車1台で行って交通費2万某円が発生。これを参加者負担の原則で今回の参加者で負担することにしたよう(当然下見に行った人も今回は負担)ところが、どこからかこれに異議を出した人がいたとかいないとか…が聞こえてきた。

下見では車1台での経費で、その車に2人で行こうと、X人で行こうと参加者負担が変わらないのに、2/Xは下見費用、その他は自前負担とするのは下見協力者に負担をかけていても、参加者の山行費用が安くなる方がいいのだという議論がなさげない。どうしてありがたいの一言で済まないのだろうか？



## 雑 感

佐坂 茂美

今回の山行では会の最長老（失礼）の植西さんの元、S Lを担当させて頂きました。植西さんとは2月の雪山も一緒させて頂きその脚力の強さに驚いたり、Yケンの岩稜では登り方も教わりもしました。これまではテント泊山行を企画・担当されたり、立場上頂いている山行届での山域は最近の山行山域とは一味も二味も違う事を知っており、それもありS Lを買って頂きました。

S Lとして参加申込の受付担当もさせて頂き、参加者数は全員で20名。これは班編成をすべきと考え勝手ながら、先輩の鈴木さん、平松さんもされたのでお二人に班長をお願いし、会員歴の浅い2名に副班長を。2班体制の山行としました。最初は先頭にC Lの植西さん、2班を挟み最後尾にS Lの佐坂。途中から、先頭と最後尾を交替しました。

各班の班長さんが自分の担当班の力（体力）、疲労度を確認し 他班が小休止しても追従することなく、歩行を続ける指示をされ、C LとS Lが全体を挟むことからして先頭を歩くと休憩の時間が取り辛くなるとの判断でした。これまでの殆どの山行で複数班に編成をした時は、班独自の判断で歩行続行や小休止を取る事は稀でした。秋山とか春山の場合には班の数も多く このような班独自での判断での山行事例は体験しておりますが 通常の山友会・例会では C L、乃至S Lが判断し全班が一斉に休憩をとるようにしているかと思えます。「班の力」を知り班員に合わせた歩調をとる。これも是かも知れません。とは言え常にC L、S Lが全員（班）を挟み、「分かれ」のある地点では進行方向を確認・指示もしました。

バス内で「山友会は山岳の会であり、常にチャレンジして欲しい」旨の山友会に対する思いのこもった挨拶には感銘を受けました。チャレンジとは決して危険な事を求めるということではなく、山に対する心構え、体力、技術を少しづつでも高めると解釈しました。

植西さんのみならず、班長をお願いしたお二人の班員に対する判断や心配り、梯子を上る際にはストックを仕舞うよう等々との的確な指示をして頂いたりして「リーダー」を学ばせて頂きました。山行自体はヒヤリハットもなく、10m程の岩場も殆ど全員がクリアし無事に全員下山。いつもの如く途中で出したり、仕入れたりと……。楽しい山行でした。

